

# 東松本『大鏡』の擦り消し痕から

Traces of Tomomatsu's Ohkagami: A Textual Study

加藤 静子

KATO Shizuko

一

東松本は書写された本文に校訂が付され、千葉本系統の本文になったものである。朱の抹消符・朱の補入符が入り、墨で訂正の文字が入る。ある時は擦り消された上に文字が記されている。抹消・補入された箇所については、かつて一覽表を作成し便宜に供した。一覽表からは、校訂された本文は、誤写によるためのもも多かったが、同時に、裏書分註本や異本系統・流布本系統と同じ本文や限りなく近い本文である例がかなりの数にのぼることがわかった。校訂前の当時の本文も提供できるという目論見から作成した表であったが、一文字昭子氏が筆跡を比較鑑定した結果によれば、校訂の筆跡には三種類以上があるという。

同様な校訂は、金沢文庫蔵の断簡『今鏡』や現蓬左文庫蔵河内本

『源氏物語』などに見えること、また同じ料紙や筆跡が見えることなどから、書写のみならず、校訂も金沢文庫関係者により行われたものかと、別稿で推定した。

ところで、校訂前の本文についてであるが、その考察はあとまわしになっている。網羅的に示すことは煩わしいので、裏書分註本の祖本を再現させてから後のことにしたい。けれども、東松本のもとの書写本文の方が、より前段階の本文の様相を呈し、また、異本系統の本文に近いことなどが知られた。校訂後の東松本本文について、より批判的に検討する必要があると感じている。

たとえば、頼忠伝の公任失言をめぐる有名な説話に、次のような本文異同がある。

公任の父頼忠関白の時代、姉の遵子が、円融帝の一の皇子の母である詮子（兼家女）をさしおいて立后した。本第での立後の儀も終

えて内裏にもどる日の行啓に、兼家邸の門前を通った際、公任は得意のあまり馬を控えて、「この女御はいつか后にはたち給らん」と邸内をのぞきこんで言ったとある。それは、兼家一族を憤慨させ、世間でもつまらぬことを言ったものと聞いていた。時も経過し、今度は兼家時代になって、一の皇子は帝位（一条帝）につき、母詮子は踐祚にともない当然立后した。立後の儀を経て同様に内裏に戻るるときと場面を設定して、近衛の将として護衛する公任に焦点が結ばれる。詮子の女房車から扇で公任が招かれる。公任に向かい進内侍が顔を差し出し、「御いもうとのすはらの后はいつくにかおはする」と言いかけた。公任の姉を「素腹の后」（ウマズメ）と侮ったわけであるが、公任は以前の自分の失言を意識してただけに、消え入りたくない思いであったと語ったという。それでも人柄もよく、公任は世に捨てられず尊重された、と記し、

かの内侍のほうかなるにてやみにき。

と閉じた。東松本では、もとの「ほうか」の「う」が消され、「ほか」という表現になった。旧日本古典文学大系では、松村博司氏は「ほか」と本文を立て、「とか」の誤写と考えられるとし、「進の内侍のあやまち」と解釈された。新潮日本古典集成も、「東」の草体「と」と「本」の草体「ほ」との類似による誤写と考えられるとし、新編日本古典文学全集でも同様に「咎（科）」と解した。

ここで他の系統の本文を見ると、古活字本では「かのないしのおりなるにて」とあって意味が通ぜず、裏書分註本の「かのないしのとかなるにて」が生かされて来た。ところで、「ほか」の本文を持つのは萩野本や披雲閣本の異本系統である。ちなみに、東松本のもとの本文は、多く異本系統、それも時代が遡る建久本や池田本（と

もに零本）に最も類似していた。

これを「ほうか」として見ると、中田祝夫・峯岸明篇『色葉字類抄研究並びに総合索引篇』（風間書房）に、

ホウカ 罽駕 ハヤリスキタリ「ハカリス、タリ」人倫部夫婦分と前田家本には「はやりすぎたり」の意とする。『大漢和辞典』によれば、「馬の逸気あつて軌轍に循わないもの」と説明され、いわばはやり馬の意である。この文脈では、女房進内侍が一人出過ぎた行為をしたという、皇太后家において公任への意趣はないということに落ち着いた意になるう。「咎（科）」として、過失、過ち、罪、欠点などの意味とするよりもすっきりしてくる。消えた本文「ほうか」を再生してみると、意味がより辿りやすくなったわけである。

ところで、擦り消された痕跡について、前稿では消された箇所の数のみをあげたが、擦り消された理由を見るに、単なる誤写のために擦り消したものと、もとの本文が、別本文であった可能性が高いものも見てとれる。擦り消されたのが、偶然のものと思えない点がある。裏書分註本を数本校合していく過程で気付き一部触れたよう<sup>4</sup>に、たとえば、「明尊」という人の僧綱名がある。東松本に「明尊僧正」と記される箇所<sup>5</sup>に、他系統本では「明尊僧都」とある。東松本を見れば、その「正」には擦り消された痕跡がある。万寿二年の史実として、訂正されたとおぼしい。

また、兼通伝では、東松本には兼通を「関白」と二箇所と呼称する。裏書分註本には二回ともに「摂政」とある。「関白」の跡をみると、東松本では二箇所ともに擦り消した痕跡が見える。そして、東松本の兼家伝において、兼通を呼称した三例目は「摂政」とある。これは非東松本すべてに「摂政」とある。三例ともに史実としては

「闕白」が正しい。けれども、『栄花物語』に兼通を「撰政」として  
いるので、それを自己葉籠中のものとして利用した『大鏡』が、  
「撰政」と誤つて踏襲していた可能性は高い。校訂に参照した本の  
段階かもしれないが、史実により校訂されたとおぼしいのである。

ここに、東松本の擦り消し痕の箇所をきちんと提供する必要が生  
じる。日本古典文学大系『大鏡』の「原状」にも記されてはいるが  
網羅はされていないし、東松本が個人蔵書でかつ重要文化財という  
貴重本であり、調査も制約されるため、ここに不十分な活字と  
して提示することにした。校異幅が小さい性格上、書写年代の古い  
東松本擦り消し痕は、どうしても視野に入れておく必要がある。

以下に報告するのは、二〇〇〇年の十二月に展示の関係で徳川美  
術館にあった東松本を調査させていただいた折のものである。徳川  
美術館の四辻秀紀氏が、巻物を巻いて下さり、調査の趣旨を汲んで  
下さつて、さまざまなお教えを下さつた。四辻氏と同行してくれた  
一文字氏の助けを借り、加藤がメモしたものである。三人の目があ  
つたとは言え、上質の厚めの料紙の擦り消しは、光線の加減でなか  
なか見にくいものもあつた。見落としや私のメモの誤りがあること  
を危惧する。今後、新たな調査をする機会に恵まれる方が、この稿  
を訂正していただくことを願いつつ、報告する。

## 二

東松本の擦り消された痕跡を見ていくと、たとえば、

283頁12 うちの御方へはま<sup>い</sup>れこの御方には

などの例のように、途中まで書いて擦り消し筆を改めたように、書  
写者による訂正は数多いと思われる。というのも、この本にミセケ

チや墨による訂正は一切ないからである。全巻別筆なのに、ミセケ  
チや補入符は朱筆で行うという徹底した方針が貫かれている。

以下の報告では、書写の際の誤りではなく、もとの本文を校訂す  
るために擦り消した可能性について見ていきたいので、擦り消し痕  
と同じ箇所が、他本では別の本文になっているものを書き入れた。  
ただし、消された文字が見えない場合がほとんどなので、他本文  
はあくまでも参考程度である。なお、擦り消しではないものの、影  
印で見きわめにくい点も付記した。

一覧を作るに当たり、「凡例」を示し、巻毎に見ていく。

### 【凡例】

・上段頁数が『対校大鏡』、下段が貴重古典籍刊行会による影印本  
『大鏡』全六冊の頁数である。

・擦り消した痕跡の箇所を、 で囲み、その上に文字がある場合  
は、文字のように示した。右傍の振り仮名位置に擦り消し痕があ  
る場合は同様に示したが、文字のない場合は、一字分程を\*で示し  
た。なお、帝紀列伝の見出し項目の下に割注らしきかなり長文の  
ものが擦り消された痕跡があり、それは   
のように示した。

・朱の圏点には○を記し、補入された文字は、「文字」で示した。

・朱により抹消された文字は、文字で示した。

・文字をなぞつた箇所には、↑で説明を加えた。

・その他のわかりにくい点は、↑で説明を加えた。

・「は改行を意味する。」

・参照した本文は、裏書分註本を陽明文庫本に、異本系統を萩野本、

流布本系統を古活字本に代表させ、それぞれ、「陽」「萩」「古」の略号で記した。また、建久本（師輔伝）、池田本（巻五卷六）の本文のある範囲は参照し、「建久」「池田」とした。擦り消した箇所に対応する各本本文に、傍線を付した。

「擦り消し痕一覧」

○巻一

- 3頁2 その御時の母後の御方のめしつかひ高名タカナの大宅世次とそ
- 4 おきな二人みかはしてあさわらふ
- 4頁5 他人のもとにやしなははれて
- 5頁6 夏山とはましけるさて十三 ↑「三」をなぞる
- 6頁7 おもひたちてまいり侍にけるかうれしき事
- 11頁13 一 五十五代 文徳天皇 (陽) (萩) (古) に割注あり。
- 14 皇后宮にあかりる給 ↑「皇后宮」をなぞる
- 14頁15 一 五十六代 清和天皇 (萩) (古) に割注あり。
- 16頁17 一 五十七代 陽成院 (萩) (古) に割注あり。
- 19頁20 かたしけなき事なれと。[是は]みな人の
- 20頁21 一 五十八代 光孝天皇 (萩) に割注あり。
- 22頁23 一 五十九代 宇多天皇 (萩) (古) に割注あり。
- 26頁24 殿上二候ける↑「二」は右下に小字で。後に補われたか。

- 27頁25 一 六十代 醍醐天皇 (萩) (古) に割注あり。
- 27頁26 一 …むまれたまふ [寛平五年四月十四日東宮に
- 29頁27 一 六十一代 朱雀院 (萩) (古) に割注あり。
- 31頁28 一 六十二代 仁明天皇 (萩) (古) に割注あり。
- 32頁29 前坊をうみ。「たて」まつらせたまふ (陽) 前坊むまれさせ給 (萩) 前坊生させ給 (古) 前坊生れさせ給
- 29 御年卅九やかて
- 29 きさきにもた、せ給ひけるにや冊二 ↑「二」をなぞる (古) 四十
- 33頁30 かくこそはよまれたりけれ ↑削って「こ」をなぞる。
- 30 いまはとてみまやをいつる ↑削って「や」をなぞる。
- 34頁31 東宮にた、せたまふ應和 ↑書写した人が削ったものか
- 35頁32 一 六十四代 円融院 (萩) (古) に割注あり。
- 37頁34 一 六十五代 花山院 (萩) (古) に割注あり。
- 36 月のかほに「にむら雲の (陽) (萩) 月のおもてに…
- 42頁40 一 六十六代 一條院 (萩) に割注あり。
- 43頁40 永観二年八月廿八日なり御年五歳寛和 ↑「寛和」小さい

43頁40 永祚二年庚寅正月五日御元服 ↑「二」を削り「正」

43頁41 一 六十七代 三條院 (萩)に割注あり。

45頁43 三條院の御券をもてかへりわたらせ

43 46 44 おさなき御こゝろに ↑「ろに」の右汚れ取る

46頁44 かへしまうさせたまひてけり。「され」は代々の

(陽)かへし申させたまふなれば (萩)かへし申させ

給ふなれば (古)かへし申させ給ければ

46頁44 いみしきことなり

(陽)いみしきことにて (萩)(古)いみしき事にて

48頁47 かたみにみかへらせたまはぬことをおもひかけすに

49頁47 一、六十八代 後三條院 (萩)に割注あり。

50頁48 たゝいまの入道殿下出家せさせたまへれと

50 うゑきは根をおほして おほくて一本

52頁51 又いとめつらしきにもみたまへりや

56頁56 いとありかたくこそ ↑字母「阿」の篇のみ擦り消し。

57頁57 右大臣五十七人 (陽)右大臣五十四人

58頁58 やかてわか御をとゝの皇子におはします

(陽)やかて御弟四の王子におはします

(萩)：我御弟四の王子におはします

59 人なくはたゝにをけるへし↑「なくは」徼により湿た感じ

61頁61 大織冠よりはしめたてまつりて

↑「め」から「た」にかけて削る

61 このきかせたまふほん人／＼も

61頁62 そのみかとの御祖父の鎌足のおと、↑削つて狭い字間に

○巻二

66頁5 このおとゝは冬嗣のおとゝの

66頁5 千手陀羅尼の験徳かふり

72頁11 ひらきはしらにつなぎこと上達部の車をは

(陽)：他の上達部の：

73頁12 人のかほうちみわたしてそれそいはゆる

(陽)：それはいはゆる：

74頁13 一 左大臣時平

(萩)に割注あり。

16 かくるゝまてもかへりみしはや (萩)かくるゝまてに

17 驛長莫驚 (陽)亭長： (萩)騎長：

78頁18 きよきこゝろは月そてらさむ

18 いひつゝけまねふにみきく人／＼

(萩)いひつゝけまなふに

80頁19 おほしめしいて、令作給ける

20 去年今夜侍清涼秋思詩。[篇]：

81頁21 世次わかうはへりしときこのことのせめてあはれに

(陽)：このことを：

88頁30 車副四人つかはせ給はさりき御さきもとき／＼

89頁31 見えたまひしかくもてなしたまひしけにや

92頁34 ものゝおかしさをそえ念せさせ

92頁34 頗事もみたれけるとか北野と

94頁37 一、左大臣仲平

94頁37 (萩)に割注あり。  
在古今類聚十五  
 花すゝき \*清慎公師輔師尹  
 97頁39 この三人の大臣達の  
 100頁44 手をとらへさせ給へりければ  
 (萩) :: させ給ければ  
 すみさまにまかり。に けれ  
 44 うちかむめりいかなり  
 101頁45 一、太政大臣実頼 酒樽公  
 (萩) (古)に割注あり。  
 103頁47 いとかなしきことなりとて目をしのこふに  
 104頁48 神の御。[たゝり]とのみいふに  
 104頁48 われにかゝせたてまつらむと思に  
 106頁50 されはかの三嶋のやしろの額と  
 (陽) :: このみしまの ::  
 110頁54 為平式部卿の御女 \*子女主  
 110頁55 この女御殿にさふらひ  
 112頁57 しるしはおはするとひと也  
 (陽) :: おはするところなり  
 (萩) :: をはする殿なり (古) :: おはする殿也  
 一、太政大臣頼忠 藤原公  
 (萩)に割注あり。  
 119頁62 恵心の僧都の頭陀行  
 119頁63 僧都は乞食  
 122頁64 村上源の九宮源の御女多武峰の  
 122頁64 いとやむことなしこの大納言殿無心の事

↑「集第十」に擦り消し

125頁68 殿のいつれにかとおもふ  
 (萩) :: いつれにのらんとかおもふと  
 (古) :: いつれにとかかおもふ  
 127頁69 ひとすちをみちのくにかみに  
 127頁70 御めのしりのすこしさかり給へるかいとらうたく  
 128頁70 御かへし女御  
 132頁75 あまたまいりたりしもこたいなりかし  
 (萩) :: こたいなりかしな  
 いて給しをそみしとそこの比  
 133頁77 (陽) (萩) :: そのころ  
 133頁78 かくみくるしき御ありさまをあまた人に  
 136頁80 あさましくあるましきことゝのみ  
 137頁82 太宮にも  
 138頁83 のちに贈太政天皇と申て 崇道本圖  
 140頁85 三条院おはしましづるかきりは  
 141頁86 よにきこゆることゝて三宮のかくて  
 143頁88 きこえさせたま。[ふ]へかなるなど  
 147頁93 物詣をもしやすらかにてなん  
 149頁96 よへの御消息くはしく申させ給に  
 151頁98 母宮たにも  
 154頁101 陣屋なとりやられけるほと  
 154頁102 雲井在後拾遺まてたちのほるへきけふりとも 抄御十一七  
 155頁103 女房に給はせ殿上にいたすほとにも ↑「も」は一部分  
 155頁103 をしへなとをこれこそは  
 157頁105 あまになし「給てうせ給にき ↑「し」が極端に長い

(陽) (秋) (古) …あまにならせ給て…

158頁106 父大将のとらせ○給へりける

161頁110 かしくく申給へるいとよきこと、

○卷三

163頁2 みかともつねにはふすへまうさせ給て

167頁8 御かへりみありかたへの女御たちの御ためも

(秋) …かたく女御たちの

(古) …かたえの女御たちの…

169頁10 春宮と申た代々の関白摂政とまうすも

(建久) …只今の… (秋) …たゝいまの

172頁13 御甥そかしその御殿に御女子女王たてまつり

13 御みつからもつねにまいりなとし

173頁14 うれしきはいかはかりかはおもふらん

↑集付け箇所を擦り消す。前行に続くことを示す線あり。

(建久) (秋) 和歌の上の句あり。

15 人のくちにのりたる秀歌にて

(陽) (建久) …いりたる (秋) (古) …入たる

174頁17 十はかりひきつけてたてられたりし

(建久) (秋) …ひきつれて

176頁18 この宮には佛法をさへあかめ給てあしさこと

179頁22 陽 (秋) この院には… (建久) (秋) …毎朝

179頁22 もろかつらふたはなからも…

181頁24 まことこのきさきの宮園子の御おとゝの中園子のきみは

こと女御みやすところそねみ給しかともかひなかりけり

(建久) (陽) …申し、かとかひ…

183頁27 (秋) …まししかとかひ…

184頁28 今集第十八 ののうちのみ 一度にとのたまひしをそのおりはおもひもとかめられさり

きにや

186頁31 (建久) (秋) …このをりは…

186頁31 つゆ御ともの人は心えさりけり

(陽) (秋) …御ともの人ゝは…

(建久) 御共の人ゝは

186頁31 ことはをのつからちり侍りけるにこそは

↑「り」文字をなぞる

187頁32 人くあまたさふらひたまひて

191頁37 …といへはそれはいかてかはさらては侍らん

↑字間詰まる

(建久) (陽) (秋) …それはいかてさらては…

(古) …それはいかてさらて侍らん

191頁38 その御ときのことをためしとせさせたまふ

(建久) (秋) …ためしとせしめ給

(陽) …ためしとせしめたまふ

193頁40 一、太政大臣伊尹

199頁48 阿闍梨君そこはなと心地よけにては

200頁49 小野宮の実資のおとゝの

…はら／＼とかゝりたりしか御なほしのうらのゝはなゝり

ければかへりて

(陽) (秋) (古) …かゝりたりしを…

(陽) (秋) (古) …花なりけるか

208頁 58 おもひかけ<sup>函</sup>。「事なれば」道理なりや

(陽) (古) 思ひかけす道理なりや

(萩) おもひかけつ道理なりや

209頁 59 いみしうからかるへきことにてなん侍へきをこの<sup>た</sup>ひ。

「申させ給はて侍」なんやと

(陽) (萩) (古) …へきをのかせ給なんやと

209頁 60 さらはさり申さしと 行末「と」を小さく入れる

210頁 60 我なとを<sup>は</sup>かくなめけにもてなすそと

(陽) われなとをふかくなめけに

(萩) われなとをふかくなめけに

217頁 70 そのころのいひことに<sup>こ</sup>そし侍。「しか」

(陽) (萩) (古) …いひことにしけるは

222頁 75 入道中将成<sup>房</sup>のきみなり

(陽) …成信のきみなり

223頁 76 為雅の女のはらなりその中将<sup>成</sup>

226頁 80 御験い<sup>み</sup>しうつかせたまひて

紫野にて人<sup>〳</sup>御くるまにめをつけて

(陽) ひと<sup>〳</sup>むらさいの、御くるまに

(萩) 人々紫野の御車に

228頁 82 我へんと<sup>し</sup>をたてまつるなり

(陽) わかへんすゑを…(萩) わかへむすへを…

228頁 82 とし<sup>〳</sup>へぬるたけのよはひをかへしても

232頁 87 ほりかはの<sup>関</sup>白ときこえさせ

(陽) 堀河の撰政… (古) ほりかはの撰政…

233頁 87 一條殿のおなしきにや。このとの、御著袴に

↑挿入符のみで言葉や文ナシ

238頁 89 やをらとりいた<sup>し</sup>。「て」ふところに

(陽) やをらとりいて、ふところに

(萩) やをらとらへてふところに

242頁 93 御心はかりはかよは<sup>し</sup>たまひながら

(陽) (萩) (古) …かよはせ給ながら

94 又堀河<sup>関</sup>白殿の御二郎

(陽) (萩) …ほりかはの撰政殿の…

260頁 98 「をんな」<sup>一</sup>所は

(陽) 女二人

(萩) 女人は

262頁 101 うへにこそとほりていて、<sup>は</sup>へりけれ

↑文字間広く三字分程度はある

(陽) (萩) (古) …いて給へりけれ

263頁 102 この<sup>中</sup>納言になりたまへるも

(陽) (古) この大納言に…

又権中<sup>將</sup>道信の君いみしき

265頁 104 御おほちの太政大臣<sup>殿</sup>我子にしたてまつりたまて

(陽) …太政大臣わか御子にしたてまつりたまひて

(萩) 御おほちのおと、我御こにしたてまつり給て

(古) …太政大臣とのわか御子にし奉り給て

267頁 106 村上のすへらきも<sup>〳</sup>やすからぬことに

269頁 109 内におおはしま<sup>せ</sup>はみかともいみしう

269頁109 (陽)(萩) (古) うちにのみおはしまして：  
らうたきものにせさせたまひてつねには

271頁111 (陽)(萩) (古) …ものにせさせ給へは：  
内にも御くるまのしりにのせさせたまはぬかきりは

271頁112 (陽)(萩) (古) しりにくさせせ…  
啓させ給けるあはれなるものからおかしくなん  
御舅の衛門督そいたき、こえ給へるに

272頁112 (萩) いたき、こえ給けるに  
右衛門督たちるなけくさめにきこえ

272頁113 (古) ましもさそありしと太政大臣殿のたまはせ  
(古) ましもさうありし…

○巻四

276頁4 すきにしかたのことはみなさいふことなれば  
277頁5 粟田口へつかはし、□あらはにはる／＼と

↑擦り消して一字分程度空白  
(陽) つかはし、かは (古) つかはしたるか…

279頁7 十一におはせしおり岡侍になしたてまつらせ  
↑「に」の下には「の」とあつた痕跡あり

280頁8 にくからぬものにおほしめしたりき  
282頁11 なきかけにもいか、といとおしかりしかは

(陽) …いとをしかりしかは  
283頁12 帥宮の御母にて

283頁12 うちの御方へはまいれこの御方には  
↑途中まで書き、擦り消して筆を改める

284頁13 自筆にか、せたまへるなり

284頁13 (陽) …給へなる (萩) …給へる (古) …給なる  
帥の宮の祭のかへさ

284頁13 式部かの。「りたる」かたをはおろして  
↑「して」の文字空間二字には広い

285頁14 この宮たちは御心のすこしかく  
287頁16 倫寧のぬしの女。「の」はらにおはせしきみ也

(萩) …むすめのはらなり  
288頁17 そのはらのきみそかし。「この」みちつなの卿の後は  
↑最後の「は」は、挿入か。

(陽) そのはらのきみそ道綱卿のちに  
(萩) そのはらの君そその道綱卿のちに

(古) その御はらの君この道綱卿後には  
いとあつしくて

289頁18 一 内大臣道隆

(陽) (古) ほぼ同じ割注、(萩) より詳しい割注  
290頁19 からすのついるたるかたを

291頁20 人にか、れてのり給をそいとけうあることに  
この殿。御醉のほとよりは

(陽) この殿の御系のほとよりは  
(萩) この殿御系のほとよりは

(古) この酔のほとよりは  
291頁21 御前の松のひかりにとをりて御らみゆるに

(陽) …こらんするに  
(古) (萩) …御らんするに

292頁21 御くるまかきおろしたれと

(古) …かきおろしたれば

293 頁 23 御心におほしならひたることなれば。「にや」

293 頁 23 御かたちそいときよちにおはしまし、はや

↑「対校大鏡」に「はや」指摘なし

(陽) (萩) 御かたちのいとけうらに…

(古) 御興のいとけそうにおはしまし、そや

294 頁 23 頭弁にてまいりたまへりけるに ↑文字間狭し

294 頁 24 いとかはらかにあてにおはせしかは

(陽) (萩) (古) …おはせしこと

296 頁 26 御さしつきの中の。「君」は

(陽) おととなかの御かたは (古) 弟中の御方

(萩) 御さしつきのなかの御かたは

299 頁 29 弘徽殿の上の御つほねのかたより

300 頁 29 さてその宮の上の。「御」さしつきの四の君は方には

(陽) さてその宮の上の御さしつきの四の御かたは

(萩) さてその宮のうへの御さしつきの四の御方は

(古) さてその宮のうへのさしつきの四の御方

300 頁 30 いまの皇。「大」后宮

302 頁 33 た、天宰の権帥になりて

(古) 只筑紫の… (萩) た、権帥になりて…

(池) た、つくしの権帥になりて…

304 頁 34 この帥殿の御共の人、いみしうはらへは

305 頁 35 なにかしといひし御随身のそらしらすして

306 頁 36 帥殿のかたより便なき事あるへしときこえて

308 頁 38 た、いまは一宮のおはしますをたのもしき

308 頁 38 人もさはいへとしたには追従し

310 頁 41 御むすめのはらに女君二人男君一人おはせしか

(陽) 女きみふたところおとききみみところ

(萩) 女二所おとこ三人 (古) 女君二所男君三所

41 さま／＼おほし、き事とも

313 頁 43 よのなかにありわひなんときは出家すはかり。「なり」と

なく／＼いひおかせたまけるに

(陽) …わひんきは、いひおほせたまひ…

(古) …わひなんきは、いひおほせ給けるに

(萩) …わつらひなんきは、いひをかせ給けるに

313 頁 44 なりにしは、そいとかなしかりしことそかし

(古) (萩) (陽) なりにしこそ…

44 明尊僧都の御房にこそおはすめれ

(陽) (萩) (古) 明尊僧正の

(萩) 坊にはおはすめれ (古) 御房にこそおはすめれ

314 頁 45 人と申ものはいみしかし名のおしければ

314 頁 45 さるはかのきみ。「さやうに」しれ給へる人かは

314 頁 46 和哥の序代か、せたまへりしそなか／＼心なき

46 優にてそれにそ人／＼ゆるし

(古) …それこそ…

315 頁 47 但馬にこそおはせしか

315 頁 48 宣旨ならぬこと

中納言はかやうに…ことのおり／＼

(古) (萩) (陽) …かたのおり／＼

320 頁 52 人のこのきは、さりととも

↑かなり狭い字間に

320頁 52

おはしまし、なり

(陽) おはしまし、そ (古) おはしまし、こそ

321頁 53

唐人のめつくるふかあなるに

322頁 54

傳殿の御子に小宰相の中將兼經の君このふたところの

(陽) …御子のにこさい相とそきこゆめるふたところの

(古) …今宰相とそきこゆる二所の

324頁 56

おなしく心をあはせて ↑「く」は直接書き入れか

(萩) おなし心に (古) 同心をあはせて

56

ひとり西國の海にいくつともなくおほいかたを

(陽) …にしくに、うみにいつこともなく…

56

あつめていかたのうへにつちをふせて

(陽) …みつのうゑに (萩) …みつのうへに

(古) 「あつめて」ナク「水の上」に

325頁 58

かへさせ給へけるこのほと事もかくいみしう

326頁 58

さりあへすたつおりもあるそかし

326頁 59

経輔のきみ又式部本などにておはすあり

327頁 59

さうそかせ給てえひひそめの織物の

織物の御指貫すこしゐいてさせ給て

雑色五六十。「人」はかりこゑのあるかきり

60

いしつえはかりにて

(萩) いしつくはかりにて…

(古) さしいつはかりにて…

328頁 61

ひとつころにめをかためまもり／＼て

(古) …めもかため…

329頁 62

いとおひた、しかりしか

いまは入道一品宮とこの

(陽) (萩) いまの… (古) 今の…

330頁 63

栗田殿とこそはきこえさすめりしか

331頁 64

もの、かきりすくられたるに北方の二條にかへりたまふ

よきもあしきもかすしらぬぬまて布衣などにて

333頁 67

きたの陣よりいてさせたまふに

336頁 71

なとこまやかにのたまへと詞もつ、かす

ひめきみなる四人おはす又あはた殿の三郎

(陽) ひめきみなるおはす四人…

340頁 75

よからぬ御事とも。「こそ」きこえしか

(萩) 又ひめ君などおはす… (古) 又姫君なる四人…

(陽) よからぬ御事ともきこえしを

(萩) よからぬ御事きこえしを

(古) よからぬ御事ともきこえしを

75

如法に孝したてまつりたまひけりとそうけたまはりし

(陽) …けうしたてまつらせ給きとそ…

(萩) (古) …たてまつり給きとそ…

○卷五

343頁 4

ゆくすゑまちつけさせ給へき御よほほひのほとに

344頁 4

このみやの母うへとまうすは

(池田) (萩) …御よそほひの…

(池田) …宮の母うへ… (萩) …宮のは、うへ…

345頁 5

長保二年庚子二月廿五日十三にて

- 6 (池田) (萩) …長保二年甲子  
 三条院の東宮におはしまし、に  
 ↑「おはし」は、織維のこすれ
- 346頁7 6 御封をえさせたまへは↑「へ」を墨でなぞるが削りはない  
 御元服させたまふてその二月にまいり  
 (池田) 御元服させ給て…  
 (萩) 御けんふくせさせ給し…  
 (古) 御元服させ給て…
- 347頁7 きさきにゐさせたまふてたゝいまの  
 (池田) 後にゐさせ給て… (萩) 後にたゝせ給て…  
 (古) 後にたてゝまつるへき…
- 348頁8 つかひつゝいひしこそおかしかりしか  
 (池田) つかひしこそ… (萩) つかふかしこそ…  
 (古) つかいしこそ…
- 348頁9 御わらはなせや君そかしか、れは  
 (池田) …これは (萩) …されは
- 350頁9 まいらせ給てはさしならひおはします  
 (池田) …おはしませと (萩) …おはしませは
- 350頁10 おほよそよのおやにておはします入道殿と申。「もさら」  
 なりおほかた  
 (池田) …申は又 (萩) …申せはおほかた  
 われも／＼とよしはみまうしたまひけれと  
 (池田) (萩) …けさうしたてまつり給けれと  
 (古) …けさうし奉り給けれと
- 354頁13 入道殿おもひをきてさせ給やうありけむそかしな
- 356頁16 (池田) (萩) (古) …あらんとそかしな  
 めてたき事ほとけにならせ給は、我御ため  
 (古) …ならせ給てわか御ために
- 357頁17 おほせられけるか<sup>皮</sup>は堂にて御くしおろさせ給て  
 かくときゝてこそされはよとのたまひけれ  
 入道殿はやくなしいたうなけきてきかれし  
 360頁20 春宮大夫中宮権大夫などの大納言にならせ給しおりはさり  
 と。「も」
- 368頁25 (萩) 東宮の大夫… (池田) …をりされと  
 (萩) …おりさりと (古) …おりされと
- 367頁24 (萩) …おりさりと (古) …おりされと  
 めてたく優におほえしとぞ  
 寛仁三年己未廿一日御出家し給へれと  
 おはしますめてたしなどいふもよのつねなり  
 (池田) …めてなしないふも
- 370頁27 (陽) …めてたしなどはいふもよのつねなり  
 みえさせたまひけりかはかりに<sup>に</sup>ならせ給ぬる人は  
 ありなれし…こゝろけかしにちよといふらん  
 わか<sup>こ</sup>とものかけたに  
 申させ給ければ中関白殿粟田殿などは  
 内大臣殿。「を」たにちかくて。「え」みたてまつり  
 こはきなめりとおほえは<sup>へ</sup>るほ
- 371頁28 (池田) (古) …おほえ侍れは (萩) …おほえ侍り  
 いとけうあることなり。「さらは」いけ  
 道隆は豊樂院道兼は仁壽殿の塗籠  
 いとさりけなくことにもあらすけにて
- 371頁29 28
- 372頁30 30
- 374頁32 30

(池田) ことにもあはすけにて

375頁 32

御刀にけつちれたるものを

377頁 35

た、毘沙門のいき本見たてまつらんやうにおはします

(池田) (萩) ……みたてまつるかやうに

(古) ……見奉るかやうに

379頁 36

えもいはすおはしましゝものかな

381頁 39

…けうもさめてことにかうなりぬちゝおとゝ帥殿に

382頁 39

案内まうし給に御くるまもとゝめたれば

(池田) (萩) (古) ……御車…

382頁 40

いとちかうち〇「よせさ」せ給て

(池田) (陽) いとちかうけちよせさせ給て

(古) いとちかうちよらせ給て

384頁 41

ひらはりのもとちかくこそつかうまつりよせたりけれ

385頁 43

いとくおしくはへりしにちゝおとゝのあなかに

(池) ……ちゝ、関白のあなかに

388頁 45

それも又さるへく

(萩) それもまたさるへく

388頁 46

されはよの中の藤氏のはしめには内大臣鎌足のおとゝを

390頁 47

そのひめ君天皇の皇子大友皇子と申しか

(池田) ……大ともの皇子 (萩) ……大伴皇子

390頁 48

二所なからさしつゝきおはしけり

391頁 49

ぬしの「のたふ事もあまのかは↑もと「まふ」とあり。

(陽) ……のたまふ事も (古) ……給ふことゝも

49 浄名居士とおほえ給ものかなといへは

(池田) (萩) 本文を欠く

396頁 55

一、房前の…神護二年三月十六日うせ給ぬ

(池田) ……三月十二日

408頁 66

中宮威子東宮の御息所の御父 ↑もとは「春」

(古) ……春みやのみやすところの御父

408頁 66

九条殿の楞嚴院あめのみかとの「聖武」の横削る

409頁 67

唐の西明寺にうつしつくり唐の西明寺の

414頁 72

(池田) ……うつしつくり… (萩) ……うつしつくり…

なを権者にこそおはしますへかめれとなん

(池田) ……おはしますへかめりとなん

415頁 73

いまひとりのおきなたゝいまはこの御堂の

416頁 74

されはものゝこゝろしりたらん人ほのそみても

(池田) (萩) (古) ……しりたる人は…

416頁 75

衣裳をさへこそあてをこなはしめ給へ ↑文字間広い

(萩) ……さへこそは給ひおこなはせ給へ

417頁 75

下人もいみしういそかりてそすゝみ

418頁 76

案のものにて倉に置たることゝなん ↑もとは「し」か。

(陽) ……置たることゝになん

418頁 76

まいりておかみたてまつり給つといへは

419頁 77

……さることをこそまたみ侍らね御てくるまに

419頁 77

枇杷殿の宮の御くしのつちに

420頁 78

御衣ともはなにかしぬしの

420頁 78

くるまのしりにそ候はれしひとへの御そはかりを

422頁 80

との先御堂ゝあけつゝ

- 422頁81 一品の宮は殿（圖）の御前なにか…
- 423頁82 なけしの（萩）おりのほら。〔せ給〕御手。〔を〕
- 429頁88 それにつけて（古）いそこそくちおしく…↑もとは「八」（は）
- 430頁89 それにてよろつをしは（萩）かられさせ給御ありさまなり
- 巻六
- 434頁3 大殿をはしめたてまつりて（古）みな人ま（池）いり給なり
- 434頁4 式部卿の宮の侍従と申しそ
- 434頁4 侍従（萩）殿鷹つかはせ給て
- 435頁4 あらはれをはしまして侍従（萩）殿にも申させおはします
- 437頁5 みな人しろしめしたることなれ（古）といみしう
- 437頁6 天曆のみかとはいとさ（古）ももりたてまつらせ給はす
- 438頁7 申されつるかことく（古）ゝたゝしきことは
- 440頁9 延喜のみかとのひとつはらの御兄弟におはします
- 441頁10 つかうまつり給へる人々み（古）さなから
- 441頁10 おほしめしたる御気色にて
- 442頁11 けしきにつ（古）きてなむ人はものは
- 442頁11 われい（古）かてふ月なか月
- 444頁13 その日左衛門陣（古）の前にて ↑「陣」の一部を削る
- こそ見苦けれと延喜に奏し申す人
- 447頁16 申さ（池田）りしことをた（古）ゆくす糸のことをこそおもひしか
- 448頁18 なつかしうなまめきたるかたは延喜にはまさり申させ給へりこそ
- 450頁20 きぬかつけられたりしも（古）からくなり（池）にきとて
- 450頁20 承香殿の女御と申しは
- 451頁21 城外やしたまへり。〔し〕といへは
- 452頁21 こまやかなること（池田）はかたられめといへは
- 454頁24 兼輔中納言良峯（古）栗樹宰相の御ふみなどもちて侍り中納言はみちのくに昏にかれ
- 454頁24 八幡にま（古）いりたうひたるに
- 455頁25 ちはやふる神のみまへのたちはなも（古）るきもともに…
- 456頁26 こかけそめてあからめさせ（古）せ侍りなむや
- 457頁27 御み（萩）に…とまること「と」もはきかせ給てまし
- 27 この高名の琵琶（古）ひき相撲節に
- 459頁29 いとくちをしきわ（古）さなりけふかゝる事とも
- 29 きゝわかせ給へはいと（古）ゝいますこしも↑「い」一画目のみ
- 461頁31 二条よりひんかしさま（古）なとに
- 31 世の案内もしらすたつき。〔なかりしかはさるへき〕

462頁32 引出てくしまうさせ給しなり ↑もとは「て」

(萩) …くしまいらせ給しなり

463頁33 上達部達の物みにいて給しに

(萩) かんたちめちんの物見に…

466頁36 ほりかはの院なればほとちかくいてさせ給に

(萩) …程とをく…

466頁37 下襲のしりはさみて移を。「き」たる馬にのりて

(池田) …うつしおきたる…

469頁39 先は神分の心経表白のたうひて

(池田) (萩) (古) …の給て

471頁41 わさとの僧膳はさせ給はて湯漬はか。「り」給ふ ↑膳のものは前

(池田) …僧前… (古) …ゆつけ斗…

476頁46 いみしうあつくてまいらせわたしたるを

476頁46 殿のきむたちのまたおとこにならせ…

476頁46 又ついてなきことには侍れと

(池田) (古) 「は」ナシ

477頁48 やうにてあらんとおほしめしけるにこそ

(萩) おほしけるにこそ

478頁48 北政所くしたてまつらせまてかすかにまいらせたまひつりけるに

(池田) …くしたてまつらせ給て…

(池田) …まいらせたてまつり給へりけるに

(萩) …まいらせ給へりけるに

(古) …まいらせ奉りけるに

478頁49 吉相にこそはありけれとおほえ侍なゆめもうつゝも ↑字間狭く横にずれて書く

(池田) (萩) …おほえ侍るな…

479頁49 御簾すたれの内はか。「り」や ↑字間狭し

(古) …うち斗や

484頁55 十はか。「り」にて陽成院の

484頁55 いとかはかりの御としともをば相人などに

484頁55 相せられやせしとへは

(古) …問は

485頁55 こと事。「と」はんと思給へしほとに

485頁56 うるはしくすなほにてへつらひ

486頁57 ことさらにあやしきすかたをつくりて

486頁57 下膳のさる事もありけるはときこしめせ ↑字間広い

(池田) …ありけるはとも…

478頁58 玉洩はいと勞ありてうたなといとよくよみき

(池田) (萩) (古) …らうありて…

488頁58 とりかひといふ題を

490頁61 それ／＼いと興に侍りし事也 ↑もと「の」字

491頁62 ひきたてよ／＼とをきて

62 三条院の大嘗会の御襖の出車

62 太宮皇太后宮よりたてまつらせ給へりしそ

492頁63 二条の大路のつふとけふりみちたりしさまこそ

492頁63 御こゝろにいれていとみせさせ給へりしかは

(萩) (古) 「せ」ナシ

492頁63 ものけたまはるくちにのるへしとおもはれけるか

492頁64 えしかあるましくこそ侍れ

493頁64 おほえたまひけんつみふかくましていかにものねたみ

494頁65 そのこと、なくとよみとててかひの、しりいてきて

三

擦り消された痕跡について少しだけ確認しておきたい。先に触れたように、書写者による訂正は、墨による訂正やミセケチが一切ないことから、かなりの数にのぼると思われる。一方で、誤写の訂正ではなく、校訂による擦り消しの可能性が高いものも混じる。

巻一では帝紀の五十五代〜六十八代の御代にわたって、帝紀の見出しの下に、かなり長い割注らしきものが消されていることに気付く。また、列伝では、時平・仲平・実頼・頼忠・伊尹・道隆伝などの見出しの下にこれも相当長い割注が消されている。すでにあった双行注を擦り消すという、統一のある校訂が施されている。それらの徹底ぶりには校訂への並々ならぬ強い意志を感じるものである。割注に関しては、異本系統の萩野本が帝紀にはすべてあり、列伝にも見出しの下に多く記していた姿勢が思い起こされる。

また、173頁14は和歌の上の句を消したものであるが、179頁22、183頁27などの集付けにも施されているのは、これは体裁を「在勅撰集名」で整えたものらしい。

人物注などの傍注にもよく注意が払われている。222頁75「入道の中将成房」の「房」と、同頁の「為雅の女のはらなりその中将」の注記「房」は、ともに擦り消されている。二箇所ある訂正の在り方から推定すると、陽明文庫本のように「成信」とあった可能性が高いであろう。また、422頁80通長とののは先御堂、あけつ、や、422頁

81「殿の御前」や、476頁46「殿のきむたち」の「道長」という人物注も気になるところである。ちなみに、校訂後の東松本と同じ系統である近衛本（京都大学附属図書館蔵）には、道長としか読めないので傍注はなく、他の箇所では道長を名指しせず、「御堂」と注する。また119頁62・63の「僧都」に対する源心の傍注は、「源信」が正しい。このような人物注にも東松本の徹底ぶりがうかがえる。なお、人物注の筆跡の全貌については、未調査なので、何段階にわたる注であるのか不明である。

第一巻には擦り消し痕は少ないが、それでも、

・ 46頁44 かへしまうさせたまひてけり。「され」は代々の

（陽）かへし申させたまふなれば（萩）かへし申させ給ふなれば（古）かへし申させ給ければ

・ 46頁44 いみしきことなり

（陽）いみしきことにて（萩）（古）いみしき事にて

などは、他の本文であった可能性が高い。ともに他本では下に続く文脈を、校訂された文ではここで終え、より整った文になっている。わずかの訂正の結果、全く別の意味になる場合もある。

たつた一、二字しか違わない箇所は、かなりの数があり、誤写とも思われるものも多い。微妙な差異を巻二から少しだけ例をあげる。

72頁11「こと上達部の車をは」、73頁12「それそいはゆる」、81頁21

「このことのせめてあはれに」、106頁50「されはかの三嶋のやしろの額と」、133頁77「この比」、など枚挙に暇ないが、他本との一文字程

の違いで、微妙なニュアンスの違いが伝わってくる。たつた一字で大きく意味が変わる例としては、たとえば、

・ 157頁105 あまになし給てうせ給にき

がある。これでは「尼になし」「うせ給」のは、父親の三条院となる。陽明文庫本・萩野本・古活字本「あまにならせ給て……」では、娘の当子内親王となり、彼女がみずから尼になりまもなく亡くなった文脈になる。校訂された東松本の「し」が極端に長いのは、もとの字間が二字以上あったかと推定でき、書写した本文段階では、「らせ」であった可能性は高いであろう。

卷三には、一部建久本という古本が残るので、問題箇所も鮮明となる。卷四も数多く見られ、卷五・六になると意味ある差異は少なくなるものの無視できないものもある。また裏書分注本が卷五・六では東松本とほぼ同文になることも注意される。

小さな校異の意味を数えただていくと、キリがないのでこれで止めたい。自分も含めて、今まであまりにも東松本の本文を絶対視し過ぎて来たという反省に立つ考察の一環である。

#### 注

- (1) 千葉本は零本。この系統の完本としては東松本や近衛本が知られる。東松本系統の名を使うと混乱するので、便宜上、書写年代の最も古い千葉本で代表させ、「千葉本系統」の名を用いる。
- (2) 加藤静子・一文字昭子「校訂が付された東松本『大鏡』が示す本文状況」(『都留文科大学研究紀要』53・54集、二〇〇〇年十月、二〇〇一年三月)。
- (3) 拙著『王朝歴史物語の生成と方法』Ⅳ『大鏡』写本研究が開く地平』第二章
- (4) 『大鏡』裏書分注本の性格」(『国文学論考』41号、二〇〇五年三月)。

(5) 見落しなのかもしれないが、六三代の冷泉天皇にのみ擦り消したあとがない。

付記 この論考は、東松みさ子氏のご厚意により、東松本を拝見することが許されて成稿となったものである。お忙しいなか、時間をさいて下さった四辻秀紀氏、そして同行して下さいました一文字昭子氏に、心より感謝申し上げます。